

Rizzi (1982) の再解釈

石 岡 精 三*

A Reinterpretation of Rizzi (1982)

Seizo ISHIOKA

0

Chomsky (1986) (以下で Barriers 理論と略記) は、境界理論 (Bounding Theory, 下接の条件 (Subjacency)) と統率理論に関わる事象を同一の「障壁」(barrier, 以下で bar. と略記) 概念を用いて統一的に取り扱うことを目指す点で画期的な理論である。しかしながら、重大な問題点を内包する理論でもある。例として、付加語の島 (Adjunct Island) からの Wh 要素移動の事例である (1) について考えてみよう。¹⁾

(1)

a. *who_i did you meet her before interviewing t_i

b. who_i did [_{IP} [you meet her] [_{PP} before [_{CP} t_i⁻¹ [_{IP} interviewing t_i]]]]

c. who_i did you [_{VP} [_{V'} meet her] [_{PP} before [_{CPT} t_i⁻¹ [_{IP} interviewing t_i]]]]

Barriers 理論は、(1a) に対して (1b) の構造を前提する。項の痕跡 t_i は V (*interviewing*) によって適正 (θ) 統率され、ECP を満足する。移動①は、VP 付加の援用により 0-subjacent となる。移動②は、PP が L 標示されないため bar. となり、その bar. 性が上位の最大範疇 IP 受け継がれる結果 2-subjacent となり、Subjacency に抵触する。しかしながら、長谷川 (1986)

原稿受付：平成3年5月24日

*長岡技術科学大学語学センター

(1-2) に共通して、I は *did* という形態で実現されている（主要部移動により、C (Complementizer) の位置に移動している）。石岡 (1990a) は、(1-2)、あるいは *to* 不定詞の *to* のように、I が C、あるいは I の位置で語彙的に実現された場合、当該 I がその sister である VP を L 標示すると前提して論を進める。²⁾この前提によって、(1-2) の文法性判断が適切に予測されることになる。また、Barriers 理論と同様に、この前提は Wh 要素の移動事象の説明における境界節点 (Bounding Node) への言及を不要にするものである。

Wh 要素移動に対する Barriers 理論の問題点は既に示された。この Barriers 理論は、イタリア語における Wh 要素移動を適切に説明するであろうか。説明しないとすれば、如何なる説明原理が考えられるであろうか。本稿は、基本的に Barriers 理論の枠組に立脚し、このイタリア語の Wh 要素移動を説明すると考えられる仮説群を提唱するものである。³⁾つまり、本稿は、境界節点と Pesetsky (1982)、May (1985) の移動経路理論の因数分解を試みるものである。

1

Rizzi (1982) 以来、境界節点がパラメータ化されると考えられている。イタリア語のような *pro* 落とし (*pro-drop*) 言語では、S' (CP) と NP が境界節点と考えられている。一方、英語の境界節点は S (IP) と NP とされる ((3) のイタリア語例は Rizzi (1982) による。斜字体下線部分は接続法形態の動詞を表す)。Rizzi (1982) は、(3) の文法性判断を適切に予測する。(3a) での移動は全て、最大で1つの境界節点 CP を越えるものである。一方、(3b-b') では、*ti* に関する移動において複数の境界節点 CP を越える (特に言及がなされない場合のイタリア語例は、Rizzi (1982) による ([] 内の表記は、Rizzi でのそれを示す))。

- (3) a. il mio primo libro_i, [_{CP}che_i [_{IP}credo [_{CP}t_i'che [_{IP} tu sappia (1) (2)]]]]]... [18a]

'my first book, which I believe that you know to whom I dedicated....'

前述したように、本稿は *bar.* を定義・設定するためには、構造情報だけでなく実現情報を勘案すべきだと主張するものである。それでは、イタリア語のどの範疇、その範疇の何に関する実現情報が問題になるのであろうか。本稿は、定動詞の法に関する実現形態が Wh 要素の移動に関与すると考える。そこで、イタリア語に関して、(3) の相違を説明すると考えられる以下の仮説を設定することにする。

仮説 α :

- (a) I はその sister である VP を一律に L 標示する。
- (b) IP が接続法節にある場合にのみ、IP の BC 性は上位の最大範疇である CP に受け継がれる (CP=*bar.*)。 ⁵⁾
- (c) 単一の SPEC 位置には、単一の Wh 要素が (一時) 停止可能である。 ⁶⁾

仮説 α によると、(3a) の移動はすべて 0-subjacent となる。(3b) では、 t_i に関する移動が 3-subjacent、(3b') では、 t_i に関する移動が 6-subjacent となる。(3b-b') が Subjacency に抵触することになる。このように、仮説 α は (3) の相違を的確に説明する (前述したように、(3) の用例はすべて、ECP を満足する)。

また、仮説 α は、以下の (4) に観察される相違を説明するであろうか。

- (4) a. non so proprio $chi_i t_i$ possa avere indovinato [$a\ chi_i$]_i affiderò questo incarico t_j [13a]
'I really don't know who might have guessed to whom I will entrust this task'
- b. *questo incarico, che_i non so proprio $chi_i t_j$ possa avere indovinato [$a\ chi_i$]_k affiderò $t_i t_k, \dots$ [13b]
'this task, that I really don't know who might have guessed to whom I will entrust, ...'
- (5) a. questo autore, [$di\ cui$]_i so [_{CP} t_i^1 che il primo libro t_i è stato pubblicato recentemente], ... [30a]

'this author, by whom I know that the first book has been published recently,...'

- b. *questo autore, [di cui]_i non so quando_j il primo libro t_i sia stato pubblicato t_j ,... [30b]

'this author, by whom I do not know when the first book has been published,...'

- (6) a. questo autore, [di cui]_i non ricordo chi_j t_j mi abbia parlato t_i per la prima volta,... [25a]

'this author, of whom I do not remember who talked to me for the first time,...'

- b. *questo autore, [di cui]_i non ricordo chi_j t_j mi abbia mostrato il primo libro t_i ,... [25b]

'this author, by whom I do not remember who showed me the first book,...'

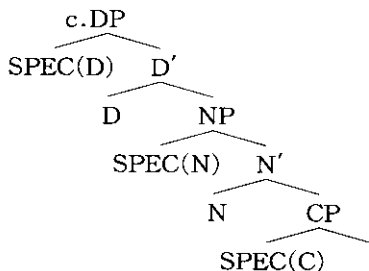
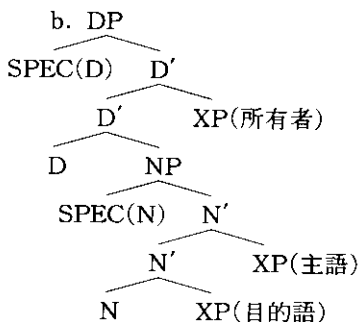
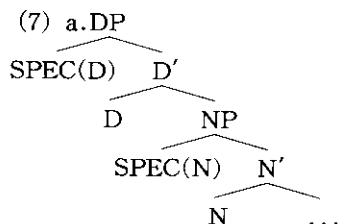
- c. questo autore, [di cui]_i ricordo [_{CP} t_i 'che mi hai mostrato il primo libro t_i '],... [25c]

'this author, by whom I remember that you showed me the first book,...'

(4) において、痕跡 t_i , t_j , t_k は適正 (θ) 統率される (ECP を満たす)。Subjacency に関し、(4a) の t_i と t_j , (4b) の t_j と t_k に関する移動はすべて、0-subjacent となる。仮説 α は、(4) の相違を的確に説明する。仮説 α は、(5b) と (6b) の事例を的確に説明する。NP (*il primo libro*) の内部構造を考慮するまでもなく、(5b) と (6b) の t_i に関する移動は Subjacency に抵触する (3-subjacent)。一方、(5a) と (6c) の事例は、Subjacency と ECP の双方を満足する必要がある。つまり、NP (*il primo libro*) の内部構造、更に、当該 NP 内での移動プロセスの検討が必須となる。仮説 α は、(6a) を誤って非文 (*) と予測する (t_i に関する移動が 3-subjacent と予測される)。つまり、(6a) は相互の移動経路関係を勘案する必要性を物語るものであろう。⁷⁾

最初に、NP の内部構造と、NP 内部での移動プロセスについて検討する。本稿では、Stowell (1989) と同様に、指示的用法の NP を D (Determiner) の最大投射、つまり DP と想定する (具体的には、(7a) の構造を前提する)。DP の主語、目的語、所有者要素の構造位置は、(7b) と前提される ((7c) は、

複合名詞句の構造を示す)。⁸⁾



(5), (6b-c) の DP 内からの Wh 要素移動と、複合名詞句内からの Wh 要素の移動には重大な相違が観察される。Rizzi (1982: 51) が指摘するように、イタリア語では複合名詞句制約が厳密に発動する (複合名詞句内からの Wh 要素移動では、当該移動要素が N の sister である CP の SPEC (C) 位置に一時停止すると考える)。

- (8) *questo incarico_i, che_i non sapevo [_{DP} la novità [_{CP} t_i¹ che avrebbero affidato t_i a te]],... [9a]
 'this task, that I didn't know the news that they would entrust to you,...'

t_i は V によって適正 (θ) 統率され、ECP を満足する。移動する Wh 要素が、SPEC (N) と SPEC (D) の双方に一時停止可能と考えて見よう。その場合、すべての移動が 1-subjacent 以下になり、当該文は誤って文法的だと予測

される。Wh 要素が SPEC (D) にのみ一時停止すると考えてみよう。この場合も、すべての移動が 1-subjacent 以下となる。SPEC (N) にのみ一時停止すると考えてみよう。D がその sister である NP を L 標示しないため、当該 NP が bar. を形成する。この NP の bar. 性が順次上位にある最大範疇に受け継がれる結果、SPEC (N) から最終着地点までの移動は、Subjacency に抵触する (4-subjacent)。⁹⁾

しかしながら、複合名詞句の場合と同様に DP 内からの Wh 要素移動の場合にも SPEC (N) への一時停止を前提する説明法は、(5a) と以下の (9) を誤って非文 (*) と予測する。

- (9) a. Gianni_i, [di cui]_i immagino [_{CP} t_i¹ che tu abbia visto la foto t_i sul giornale],... [27c]
 'Gianni, of whom I imagine that you have seen the picture on the newspaper,...'
 b. Gianni_i, [di cui]_i so [_{CP} t_i¹ che una foto t_i è apparsa recentemente sul "Gazzettino"],... [29a]
 'Gianni, of whom I know that a picture appeared recently in "Gazzettino",...'

(5a) は、DP (*il primo libro*) の主語である Wh 要素が文の主語内部から移動する例である。この場合、t_i は SPEC (N) の位置にある中間痕跡によって適正 (先行詞) 統率される (ECPを満たす)。しかしながら、SPEC (N) から埋め込まれた節の SPEC (C) (embd. SPEC (C) と略記) への移動が Subjacency に抵触する (3-subjacent)。DP (*una foto*) の主語、あるいは目的語である Wh 要素が移動する例も同様に Subjacency に抵触することになる。

Cinque (1980) が指摘するように、イタリア語では、DP 内部に生起する単独の Wh 要素は当該 DP 内部から移動可能である。前述したように、複合名詞句内からの移動の場合と同様に、Wh 要素が SPEC (N) の位置に一時停止可能と考えると、不都合が生ずる。つまり、DP 内部からの移動一般が非文 (*) と予測されることになる。明らかに、これは事実と反する。この不都合は、ある特定の条件下で D がその sister である NP を L 標示すると仮定することにより、部分的に打開可能である。ここで、移動する Wh 要素が DP 内の

D',あるいは N' に直接支配された位置に基底生成された場合に限り, 当該 D はその sister である NP を L 標示すると前提する. これらの前提にも関わらず, 文の主語である DP の内部からの Wh 要素の移動は非文(*)と予測される. 文の主語である DP は, I' の sister であるため, L 標示されない (DP=bar.). DP の bar. 性が直接上位の最大範疇である IP に受け継がれる. 結果として, 当該移動は Subjacency に抵触することになる (2-subjacent). つまり, 英語の場合とは異なり, 一般的にイタリア語では主語条件が発動しないと前提する必要がある.

移動する要素が最大範疇を飛び越える方向は, 二通りである. 移動する要素が最大範疇の直接支配する左分枝, あるいは右分枝を経由する場合である (前者を XP (ノ), 後者を XP (へ) と表記する. また, この飛び越しの方向性は, 統率の方向性と異なる概念である). これまでの考察が正しいものとすれば, イタリア語では (少なくとも, DP に関し), 最大範疇 XP (ノ) は bar. を形成しないと考えるをえないであろう (パラメータ).

しかしながら, これまで設定された仮説群は (6a) と以下の (10) を説明できない.

- (10) a. Gianni_i, [di cui]_j immagino [_{CP} [in che occasione]_j ti abbiano parlato t_i t_j],... [27a]
 'Gianni, of whom I imagine in which occasion they talked to you,...'
 b. *Gianni_i, [di cui]_j immagino [_{CP} [in che occasione]_j tu abbia visto la foto t_i t_j],... [27b]
 'Gianni, of whom I imagine in which occasion you have seen the picture,...'
 c. *chi_i, ti domandi chi_j t_j ha incontrato t_i [7a]
 'whom do you wonder who met'

これまでの仮説群は, (10a-b) の [di cui] の移動を 3-subjacent と予測する. (10c) の移動は, すべて 0-subjacent と予測される. つまり, 本稿の仮説群は (10a-b) を非文, (10c) を文法的と予測する.

Pesetsky (1982), May (1985) 等は, 文法性判断を要素の移動経路関係によって説明する. 本稿が対象とする事象は, 始発移動経路の相対関係に基づく

仮説により説明可能である。¹⁰⁾そこで、上で観察された不都合を打開すべく、仮説 α を以下のように修正することにする。

仮説 β ：

- (a) I はその sister である VP を一律に L 標示する。
- (b) 接続法節にある IP の BC 性は、直接上位の最大範疇である CP に受け継がれる (CP=bar.)。ただし、複数の Wh 要素移動においては、両始発移動経路が包含関係を形成する場合に限り、この IP の BC 性受け継ぎは停止する。
- (c) 直說法節、条件法節にある IP の BC 性は、直接上位の最大範疇である CP に受け継がれない (CP \neq bar.)。ただし、複数の Wh 要素移動において、両始発移動経路が包含関係を形成する場合に限り、この IP の BC 性受け継ぎは発動する。
- (d) SPEC 位置には、単一の Wh 要素が一時停止可能である。
- (e) Wh 要素が DP を通過する場合、SPEC (N) の位置にのみ一時停止可能である。
- (f) 一般的に、D はその sister である NP を L 標示しない。ただし、D' あるいは N' に直接支配された位置に基底生成された Wh 要素の場合に限り、D はその sister である NP を L 標示する。
- (g) 左分枝に生起する DP (ノ) の bar. 性は逆転する (左分枝に生起する DP (ノ) に対する I' の L 標示機能は逆転する)。

仮説 β は、これまで提示した例すべての文法性判断を的確に予測するであろう。

3

仮説 β 内にある (c) の後半部は、(10c) のパターンを説明するために設定したものである。これはまた、対応する接続法節内の IP の BC 受け継ぎに関する規定 ((c) の後半部) と並行するものである。しかしながら、この (b)、(c) の後半部は、(11) の文法性判断を的確に予測しない ((11a) は、Adams (1984) による)。

- (11) a. *il pane che_i Maria si domanda chi_j t_j ha mangiato t_i*
 'the bread that Maria wonders who has eaten'
 b. *tuo fratello, [a cui]_i mi domando [che storie]_j abbiano*
raccontato t_j t_i,... [6b]
 'your brother, to whom I wonder which stories they told,...'

(11) の痕跡はすべて、ECP を満足する。(11a) において、*che_i* と *chi_j* の始発移動経路は包含関係を形成する。仮説βの(c)の規定により、*embd.IP* の BC 性は上位の最大範疇に受け継がれる。結果として、*t_i* に関する移動が Subjacency に違反することになる (3-subjacent)。(11b) では、始発移動経路は包含関係を形成しない。仮説βの(b)の規定により、*t_i* に関する移動が Subjacency に抵触する (3-subjacent)。つまり、仮説βは、(11) を誤って非文と予測する。つまり、このように不適切な文法性判断の予測を引き起こす仮説βの(b)と(c)を修正する必要が生ずる。

最初に、仮説βの(c)の修正案について考える。仮に、(10c) が仮説βの(c)以外の規定によって排除されるならば、当該規定(c)を仮説βから削除可能になる。(10c)と(11)の相違に注意されたい。(10c)は、疑問詞 Wh 要素が同じ疑問詞 Wh 要素を飛び越す移動であり、(11)は、関係詞 Wh 要素が疑問詞 Wh 要素を通過する移動である。ここで、英語と異なりイタリア語では、関係詞 Wh と疑問詞 Wh が弁別されると考えてみよう。更に、同種の Wh 要素を飛び越える(通過する)移動が排除されると仮定してみよう。¹¹⁾ Rizzi (1982) も指摘するように、この仮定は統語移動(S移動)、LF 移動に当てはまるものである。これは、Rizzi (1982) が提示する(12-13)に観察される文法性判断上の並行関係によって裏付けられるであろう((12-13)のそれぞれに観察される文法性判断の相違については後述する)。

- (12) a. **chi_i ti domandi chi_j t_j ha incontrato t_i [7a]*
 'whom do you wonder who met'
 b. *? ? chi_i non sai [che cosa]_j t_i ha fatto t_j [7b]*
 'who_i don't you know what_j t_i did t_j'
 c. *? ? [a chi]_i non sai [che cosa]_j ho detto t_j t_i [7c]*
 '[to whom]_i don't you know what_j I said t_j t_i'

- (13) a. *mi domando $chi_i t_i$ ha incontrato chi_j [8a]
 'I wonder who met who'
 b. ? ? non so ancora $chi_i t_i$ ha fatto [che cosa] $_j$ [8b]
 'I do not yet know who did what'
 c. ? ? non so [che cosa] $_i$ hai detto t_i [a chi_j] [8c]
 'I do not know what you said to whom'

次に、(11) について検討する。前述のように、仮説 β は当該文を誤って非文(*)と予測する。適切な文法性判断を実現するためには、IP の BC 性受け継ぎを停止させる必要がある。(11a) に関する問題は、一般的に直説法節にある IP の BC 性受け継ぎを停止させることにより打開される。また、(11b) が惹起する問題は、両始発移動経路が包含関係を形成しない場合でも、ある特定の条件下で IP の BC 性受け継ぎを停止すると仮定することにより打開されると思われる((11b)において、 t_i と t_j が同位の位置にあることに留意されたい)。具体的には、前述の DP に対する I' の L 標示機能の逆転と同様に、IP の BC 性受け継ぎの逆転を想定することになる。

(12-13) それぞれに観察される相違を除き、これまで提示した用例すべての文法性判断を説明すべく、仮説 β を以下のように修正することにする。

仮説 γ ：

- (a) イタリア語において、疑問詞 Wh 要素と関係詞 Wh 要素が弁別され、同種の Wh 要素を飛び越える移動は排除される。
 (b) I はその sister である VP を一律に L 標示する。
 (c) 接続法節にある IP の BC 性は、直接上位の最大範疇である CP に受け継がれる (CP=bar.)。ただし、複数の Wh 要素移動においては、両始発移動経路が包含関係を形成する場合に限り、この IP の BC 性受け継ぎは停止する。
 (d) 直説法節、条件法節にある IP の BC 性は、直接上位の最大範疇である CP に受け継がれない (CP \neq bar.)。
 (e) 複数の Wh 要素移動において、それぞれの initial trace が同位の位置にあり (定義上、両始発移動経路は包含関係を形成しない)、両移動が一時停止不可の場合に限り、当該痕跡が生起する節にある IP の BC 性受け継ぎは、基底生成された位置に関して

より左方にある initial trace (A) に適用され、より右方の initial trace (B) に対しては initial trace (A) に適用された BC 性受け継ぎと反対の機能が適用される (BC性受け継ぎの逆転)。

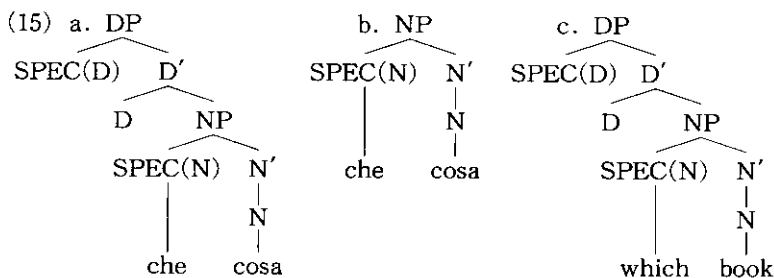
- (f) SPEC 位置には、単一の Wh 要素が一時停止可能である。
- (g) Wh 要素が DP を通過する場合、SPEC (N) の位置にのみ一時停止可能である。
- (h) 一般的に、D はその sister である NP を L 標示しない。ただし、D' あるいは N' に直接支配された位置に基底生成された Wh 要素の場合に限り、D はその sister である NP を L 標示する。
- (i) 左分枝に生起する DP (ノ) の bar. 性は逆転する (左分枝に生起する DP (ノ) に対する I' の L 標示機能は逆転する)。

仮説γは、(14) のそれぞれに対して以下の文法性判断上の予測を可能にする。

- (14) a. *il pane che_i Maria si domanda [a chi]_j Luigi abbia dato t_i t_j
- b. il pane che_i Maria si domanda [a chi]_j Luigi ha dato t_i t_j
- c. il pane che_i Maria si domanda chi_j t_j abbia dato t_i a Luigi
- d. il pane che_i Maria si domanda chi_j t_j ha dato t_i a Luigi¹²⁾

4

ここで、(12-13) を再検討する。仮説γは、(12a) と (13a) の文法性判断を的確に予測する。同時に、(12b-c) と (13b-c) をも非文 (*) と予測することになる。イタリア語の *che cosa* は、機能上、英語の *what* に対応するものである。しかし、構造に関しては内部構造を有するものである。本稿では、*che cosa* が例えば英語の *which book* と同じ構造を持つと前提する。つまり、構造上、*che cosa* は DP を形成し、*che* は SPEC (N) 位置に生起すると考える (機能に関しては、*chi* (*who* (*m*))) のような単純疑問詞と同様、*che cosa* が NP であるが)。具体的には、複合疑問詞 *che cosa* に対して (15a) の構造が想定される ((15b) は単純疑問詞として機能する場合の構造、(15c) は英語 *which book* の構造を示す)。



更に、DP (の構成要素) としての *che cosa* は、SPEC (D) の位置に一時停止可能と考えられる。¹³⁾ 構造と機能、換言すれば単純疑問詞 (NP) としての *che cosa* と複合疑問詞 (DP) としての *che cosa* の間に揺れが考えられるのである。

仮説γの (a) は、単に同種の Wh 要素同志の飛び越え、例えば、疑問詞 Wh 要素が疑問詞 Wh 要素を飛び越えることを排除するものである。移動経路、その移動が始発移動であるか後続移動であるか言及していない。これまで観察したように、本稿において重要な役割を果たすのは、(準) 始発移動経路であった。つまり、仮説γの (a) は、始発移動に言及する形で修正するのがより妥当と考えられる。そこで、この (a) を以下のように書き換えることにする。

仮説γ:

- (a') イタリア語において、疑問詞 Wh 要素と関係詞 Wh 要素が弁別され、同種の Wh 要素が関与する場合、それぞれの始発移動経路が重複する移動は排除される。

結果として、NP としての *che cosa* の場合は、仮説γの (a') の規制に抵触するため、非文 (*) と予測されることになる。一方、DP としての *che cosa* の場合は、始発移動経路が重複しない。よって、この場合は文法的と予測と予測されることになる。つまり、(12b-c) と (13b-c) の文法性判断 (??) は、正反対の文法性予測がなされるこの2つの派生構造の干渉によって説明されるであろう (石岡 (1990a) は、この2つの構造を共鳴構造 (Resonance Structure) と呼び、英語に対してもこの説明法を適用する)。¹⁴⁾¹⁵⁾

仮説γの (c) と (d) は、それぞれ接続法と直説法 (条件法) に関するも

のであるが、付帯事項が設定されているのは (c) の接続法のみである。明らかに、直説法 (条件法) に対しても、付帯事項の設定が予想されるであろう。これまで検討した用例と (16a), (17a) と (17c) は、仮説 γ によって説明可能であるが、(16b), (17b) (17b') は説明不可能である。

- (16) a. mi sto domandando [a chi]_i potrei chiedere t_i quando_j dovrò parlare di questo argomento t_j [15a]
 'I am wondering whom I could ask when I will have to talk about this topic'
- b. *questo argomento, [di cui]_i mi sto domandando [a chi]_j potrei chiedere t_j quando_k dovrò parlare t_i t_k,... [15b]
 'this topic, of which I am wondering whom I could ask when I will have to talk,...'
- (17) a. Gianni, [a chi]_i ritengo [_{CP} t_i¹ che tu sappia [che cosa]_j voglio regalare t_j t_i],... [20a]
 'Gianni, to whom I believe that you know what I want to give,...'
- b. *Gianni, [a chi]_i so [che cosa]_j ritieni [_{CP} t_i¹ che voglio regalare t_j t_i],... [20b]
- b'. *Gianni, [a chi]_i so [che cosa]_j ritieni [_{CP} t_j¹ che voglio regalare t_j t_i],... [20b]
 'Gianni, to whom I know what you believe that I want to give,...'
- c. il tuo libro, che_i Gianni mi ha detto [_{CP} t_i¹ che non si ricorda più [a chi]_j ha prestato t_j t_i],... [21a]
 'your book, that Gianni told me that he doesn't remember anymore to whom he lent,...'

仮説 γ は、(16b), (17b) と (17b') を誤って文法的と予測する。ここで、(16b) の t_i に関する始発移動と、(17b) の t_i に関する後続移動経路と t_i に関する始発移動経路、(17b') の t_i に関する始発移動経路に注意されたい。これらの移動経路上で、直説法→条件法と直説法→直説法の直接連続が観察される。(16-17) の文法性判断を的確に予測するためには、この連続に関する付帯事項

の設定が必要と考えられる。そこで、仮説 γ の(d)を以下のように修正することにする。

仮説 γ ：

- (d') 直説法節、条件法節にある IP の BC 性は、直接上位の最大範疇である CP に受け継がれない (CP \neq bar.)。ただし、複数の Wh 要素の(始発)移動経路が包含関係を形成する場合を除き、1 サイクルの(始発、後続)移動経路上において、最も下位にある動詞とその直接上位にある動詞が共に直説法(条件法)の場合、その最も下位にある動詞が生起する節中の IP の BC 性は上位範疇に受け継がれる (BC 性受け継ぎの逆転)。

しかしながら、この仮説 γ (d')は、(17c)と以下の(18)を誤って非文(*)と予測する。

- (18) *il solo incarico che_i non sapevi [a chi]_j avrebbero affidato t_i t_j è poi finito proprio a te* [6a]
 'the only charge that you didn't know to whom they would entrust has been entrusted exactly to you'

(18)を詳しく検討してみよう。 t_i と t_j は構造上同位の位置に基底生成される。最も深く埋め込まれた節には条件法の動詞が生起する。仮説 γ の(e)は、 t_i に対する IP の BC 性受け継ぎを停止し、一方、 t_j に対してはその受け継ぎを発動させる。結果として、仮説 γ の(e)は、(18)を適切に文法的と予測する。一方、(16b)、(17b)と(17b')に対して仮説 γ (e)は適用され得ない(一時停止可能な移動)。

仮説 γ の(d')が惹起する問題は、同位の位置に基底生成された痕跡 t_i と t_j の双方に対して当該仮説が適用されると考えることに由来すると考えられる。直説法(条件法)の直接連続による IP の BC 性受け継ぎが、基底生成された位置に関してより右に生起する要素に適用されると考えられる。この前提は、(18)と(17c)の文法性を適格に予測する。結果として、仮説 γ の(d)は、以下のように修正されることになる。

仮説γ:

- (d'') 直説法節, 条件法節にある IP の BC 性は, 直接上位の最大範疇である CP に受け継がれない ($CP \neq \text{bar.}$). ただし, 複数の Wh 要素の (始発) 移動経路が包含関係を形成する場合を除き, 1 サイクルの (始発, 後続) 移動経路上において, 最も下位にある動詞とその直接上位にある動詞が共に直説法 (条件法) の場合, その最も下位にある動詞が生起する節中の IP の BC 性は上位範疇に受け継がれる (同位の位置に基底生成された要素に関しては, より右に生起する要素に対してこの BC 性受け継ぎが発動する) (BC 性受け継ぎの逆転).

これまで検討した移動経路はすべて, 定動詞が生起する節内からのそれであった。それでは, 不定詞節内部からの移動は, 定動詞節内部からの移動と同様の説明を許すであろうか。 (19-20) について検討する。

- (19) a. *quest'uomo che_i non so se ritieni [_{CP} t_i¹ che Mario conosca t_i abbastanza bene],... [43a]
'this man, that I do not know whether you believe that Mario knows well enough,...'
- b. ?quest'uomo che_i non so se ritieni [_{CP} t_i¹ di conoscere t_i abbastanza bene],... [43b]
'this man, that I do not know whether you believe to know well enough,...'
- (20) a. *Mario, che_i non immagino perché_j tu abbia deciso [_{CP} t_i¹ che non incontrerai t_i t_j],... [44a]
'Mario, that I do not imagine why you have decided that you will not meet,...'
- b. ? Mario, che_i non immagino perché_j tu abbia deciso [_{CP} t_i¹ di non incontrare t_i t_j],... [44b]
'Mario, that I do not imagine why you have decided not to meet,...'

これまで設定された仮説群は, (19a) と (20a) を非文と予測する。同時に,

誤って (19b) と (20b) をも非文で予測することになる。(19b) と (20b) の始発移動経路が、動詞が不定詞の形で実現された節内にあることに注意されたい。ここで、不定詞節内にある始発移動経路と定動詞の生起する節内にあり、あるいはそれを通過する後続移動が Union により、準始発移動経路を形成すると考えてみよう。その場合、(19b) と (20b) は文法的と予測されることになる。この場合もまた、複数の派生構造が想定されることになろう。つまり、(19b) と (20b) に対して、共鳴構造の説明法を適用することにより、当該文の文法性判断(?) が説明されると考えられる。¹⁶⁾

最後に、文の主語である Wh 要素が長距離移動する事例について考える。

- (21) a. ? questo incarico, che_i non so proprio chi_j t_j possa avere
indovinato [a chi]_k t_i è stato affidato t_k,... [22a]

‘this task, that I really don’t know who might have guessed to
whom has been entrusted,...’

- b. ? il tuo libro, che_i Gianni non si ricorda più [a chi]_j ha detto t_j
[_{CP} t_i¹ che t_i è rimasto a casa mia],... [22b]

‘your book, that Gianni doesn’t remember to whom he said that
has been left in my house,...’

(21a) の t_j, t_k に関する移動は、ECP と Subjacency を満足する。しかし、t_i に関する移動は、接続法節内にある IP の BC 性受け継ぎが発動し、ECP と Subjacency の双方に抵触する (3-subjacent)。 (21b) の t_j に関する移動は、ECP と Subjacency を満足する。しかし、t_i に関する継続移動が直説法節→直説法節の直接連続を通過するため、3-subjacent となり Subjacency に抵触することになる (ECP は満たされる)。結果として、本稿の仮説群は (21 a-b) を誤って非文 (*) と予測することになる。

Rizzi (1982) も指摘するように、イタリア語には本稿が考察対象とする移動による関係節形成と、(22) で観察されるような再述代名詞 (Resumptive Pronoun) によるそれがある。

- (22) % questo incarico, che_i non sapevo la novità che lo avrebbero
affidato a te,... [註 6 (i)]

‘this task, that I didn’t know the news they it would entrust to

you,...'

周知のように、再述代名詞による関係節形成は移動によるものではない。よって、ECP と Subjacency の規制を受けない。また、イタリア語は *pro* 落とし言語に属する。よって、主語（再述）代名詞は脱落可能である。つまり、(21) で観察される関係節形成は、移動によるそれか、再述代名詞によるそれかが、見かけ上区別がつかない。結果として、(21) に対しては、2つの派生構造が考えられるのである。移動による関係節形成の場合は（*）と予測され、再述代名詞による場合は文法的と予測される。この事例も又、共鳴構造の理論によって、その文法性判断が説明されることになる。これまでの考察によっても、(14) に対する文法性判断上の予測は変わらない。

5

本稿では、境界節点に関する因数分解、つまりイタリア語における Wh 要素移動を障壁理論の立場から再解釈がなされた。本稿はまた、文法性判断上の適切な予測を実現するためには、ある要素の構造情報だけでなく、その実現情報の勘案が必須であるという主張に基づくものであった。イタリア語における Wh 要素移動を適切に説明するためには、法に関する実現情報（接続法 vs. 直説法（条件法））と移動経路関係の勘案が必要であることが示された。つまり、bar. の定義・設定には、構造情報と同時に実現情報の勘案も不可欠であることが示された。この点で、本稿は、移動経路が重複するとき、両経路が包含関係にある事例が文法的で、両経路が交差する事例が非文（*）になると主張する Pesetsky (1982)、May (1985) と異なるものである。¹⁷⁾

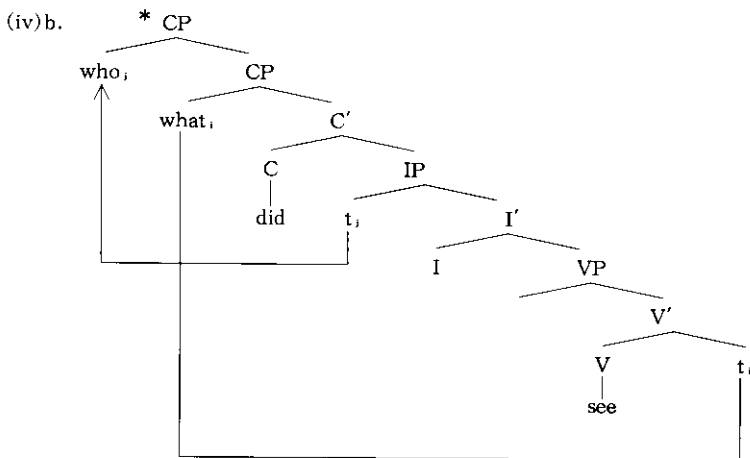
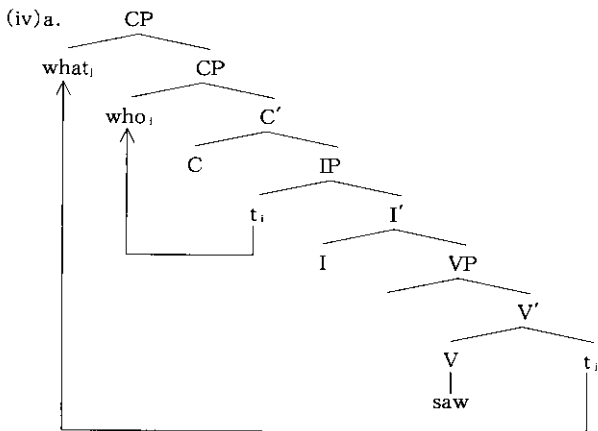
(14) に対する予測、異なるパターンでの Wh 要素の移動事象の検討、そして仮説γの修正（特にその簡略化）が必要であることは言うまでもない。¹⁸⁾

註

- 1) bar. の定義体系に関しては、Chomsky (1986) を参照されたい。
Chomsky (1986) の bar. 定義では、構造情報のみに関与し、ある要素がどのような形態で実現されるか、つまり、実現情報が勘案されていない点に留意されたい。
- 2) sister である VP を L 表示する I を I^{ex} と呼ぶ。(1-2) 中の I は $I^{ex.aux}$ 、to 不定詞の I は $I^{ex.to}$ 、更に、関係節、あるいは話題化のように、SPEC (C) 位置に生起する operator による I は $I^{ex.op}$ と規定する。 $I^{ex.aux}$ の機能は、ある特定の条件の下でより深く埋め込まれた節中の I に受け継がれると仮定される。詳細は、石岡(1990a)を参照されたい。

- 3) Barriers 理論以前の境界理論は、境界節点の設定によるものである。何故に、ある要素が境界節点を構成するののかという議論はなされなかったと思われる。この議論を明示的に問題にし、解決しようとした、つまり、境界節点を更に因数分解した理論が Barriers 理論であると言えよう。これと同様に、Pesetsky (1982), May (1985) の提唱する移動経路理論を因数分解することも可能であろう。
- 4) 英語では、ある特定の I に限り、その sister である VP を L 標示すると前提される。しかしながら、この前提は、do-support に対応する要素を持たない他のゲルマン語には妥当しないであろう。つまり、ドイツ語、オランダ語のような言語では、一律に、I がその sister を L 標示する、あるいは、L 標示しないと考えるなければならない (VP 付加を全廃する立場からは、I はその sister を L 標示すると考えるなければならないであろう)。
- 5) これを、IP の BC 性受け継ぎと呼ぶことにする。CP の bar. 性が、更に同一サイクルの移動経路上で上位にある最大範疇に受け継がれるのは言うまでもない (bar. 性の受け継ぎ)。
- 6) Reinhart (1981), Adams (1984) は、SPEC (C) 位置に2つの Wh 要素が (一時) 停止する (あるいは、2つの SPEC 位置を確保する) と前提して論を展開する。しかしながら、この前提は、VP 付加と同様に、表層構造においてその反映が皆無であることから、問題のある立論であろう。
- 7) 英語における IP の BC 性受け継ぎと、移動経路関係については、石岡 (1990a) を参照されたい。
- 8) 石岡 (1990c) は、この DP 構造を出発点として、スペイン語の DP 内からの Wh 要素の抽出移動を説明する。本稿では、基本的に英語と同様に、N はその sister を L 標示し、D はその sister を L 標示しないと前提される。詳細は、当該論文を参照されたい。
- 9) 石岡 (1990a) では、複合名詞句内からの Wh 要素の移動が SPEC (N), SPEC (D) の双方に一時停止不可と前提して論を進めた。しかしながら、複合名詞句と DP 内からの Wh 要素の移動に関する相違を最小限の仮定を設定して説明するという観点からすれば、本稿での前提がより妥当するものであろう。
- 10) ある要素の移動経路とは、その要素が飛び越す (通過する) X', XP 範疇の連鎖を指す。また、石岡 (1990a) と同様に、 $A \rightarrow B \rightarrow C$, $A \rightarrow B \rightarrow C \rightarrow D$ のように、始発項を共有する移動経路は包含関係を形成しないと考える。
- 11) これに関連しては、Adams (1984), Reinhart (1981) を参照されたい。
- 12) 母国語話者に対する調査は未実行。
- 13) 英語の LF 移動において、単純疑問詞と複合疑問詞の振る舞いの相違が観察される。以下の (i - ii) は、それぞれ優位性効果、純優位性効果の例である。
 - (i) a. $\text{who}_i \text{ } t_i \text{ saw what}_j$
b. $*\text{what}_i \text{ did who}_j \text{ see } t_i$
 - (ii) a. $\text{who}_i \text{ does John expect } t_i \text{ to read what}_j$
b. $*\text{what}_i \text{ does John expect who}_j \text{ to read } t_i$
 石岡 (1990a) の前提では、(i - ii) 中の matrix I と embd. I は共に I^{lex} と指定される (I はその sister である VP を L 標示する)。また、Wh 要素の LF 移動は、CP への付加移動と考えられている。また、本稿と同様に、始発移動経路関係が重要な役割を果たす。具体的には、以下の仮説が設定される。
 - (iii) a. S 構造においては、両始発移動経路が包含関係にある場合に限り、IP の BC 性受け継ぎが停止する。

- b. LF 構造においては、両始発移動経路が包含関係にある場合、あるいは両始発経路が overlap しない場合に限り、IP の BC 性受け継ぎが停止する。
 - c. S 構造においては、ECP は選言的に発動する (θ 統率、あるいは先行詞統率)。LF においては、ECP は先行詞統率に一元化される。
 - d. LF においては、Subjacency が発動しない。
 - e. LF 移動では、項である Wh 要素は SPEC (C) 位置に一時停止しない。
- (iv-a) は (ia-b) に対応する LF 構造である。



(ivb) では、始発移動経路が包含関係を形成しないため、IP の BC 性が直接上位の最大範疇である CP (より上位にある CP) に受け継がれる (LF では、付加構造を形成するそれぞれの CP が最大投射と考えられている)。結果としては、(ivb) の t_i が ECP に抵触することになる。

複合疑問詞 (例えば *which man*) は、異なる振る舞いを示す。

(v) a. $\text{what}_i \text{ did } [\text{which man}]_j \text{ see } t_i$ ((ib) と対比)

b. $\text{what}_i \text{ does John expect } [\text{which man}]_j \text{ to read } t_i$ ((iib) と対比)

この複合疑問詞の特殊性は、当該疑問詞が DP であり、始発移動経路が SPEC (D) へのそれであると考えることにより説明可能である。複合疑問詞の特殊性は、LF 移動に限定されるものではない。その特殊性は、S 構造においても観察される ((vi) は Grimshaw (1986) による)。

(vi) a. $[\text{which book}]_i \text{ did the students forget } \text{who}_j t_j \text{ wrote } t_i$

b. $[\text{which book}]_i \text{ did the TAs tell the students } [\text{CP } t_i^1 \text{ that they shouldn't forget } [\text{CP } \text{who}_j t_j \text{ wrote } t_i]]$

c. $*[\text{which book}]_i \text{ did the students forget } [\text{CP } \text{who}_j t_j \text{ told them } [\text{CP } t_i^1 \text{ that Dorothy Sayers wrote } t_i]]$

d. $*[\text{which book}]_i \text{ did the students forget } [\text{CP } \text{who}_j t_j \text{ asked/ told them } [\text{CP } \text{who}_k t_k \text{ wrote } t_i]]$

複合疑問詞が統語移動する場合には、始発移動経路とそれに直結する後続移動が Union を形成すると考えられる。つまり、複合疑問詞が統語移動する場合には、Union による準始発経路が問題になる。この準始発移動経路と単純疑問詞の始発移動経路の関係により、(vi) の相違が説明される ((iia) を参照されたい)。詳細な検討は、他の機会に譲ることにする。

- 14) 共鳴構造によって、文法性判断が文法的よりも傾斜するか (?), 非文よりも傾斜するか (?*, ??) の要因の画定をする必要があるであろう。これに関する考察は、他の機会に譲ることにする。また、この種の共鳴構造による説明法は同種の Wh 要素が関与する場合にのみ妥当する。この場合、*che cosa, che storie* (*what stories*) は SPEC (D) の位置に一時停止せず、構造上の DP 全体が移動すると考えなければならない。
- 15) Rizzi (1982, 註 (5)) は、統語移動 (S 移動) において疑問詞 Wh 島から移動する疑問詞 Wh 要素が重名詞句の場合、その認容度がかなり高くなると言う ((ib)). また、この認容度の上昇は S 移動に当てはまるもので、LF 移動では観察されないとも言う ((ib)).

(i) a. $? ? [\text{a chi}]_i \text{ non ti ricordi } [\text{quanti soldi}]_j \text{ hai dato } t_i t_j$

'to whom don't you remember how much money you gave'

b. $[\text{a quale dei tuoi figli}]_i \text{ non ti ricordi } [\text{quanti soldi}]_j \text{ hai dato } t_i t_j$

'to which of your sons don't you remember how much money you gave'

c. $\text{non mi ricordo } [\text{quanti soldi}]_i \text{ hai dato } t_i [\text{a quale dei tuoi figli}]_j$

'I do not remember how much money you gave to which of your sons'

quanti soldi が NP、あるいは DP として機能し、*a quale dei tuoi figli* が DP として機能すると仮定すると (SPEC (D) に一時停止する)、本稿の仮説群は (ia) と (ib) の相違を説明可能である。しかし、LF 移動に関する何らかの補助仮説を設定しなければ (ic) は説明不可能である。

- 16) 以下の (i) の文法性判断も同様の論法で説明可能である。

(i) (?) Francesca, $[\text{di cui}]_i \text{ non so dove } t_i \text{ abbia sentito } t_j [\text{CP } t_i^1 \text{ parlare } t_i \text{ prima d'ora, ... } [26a]]$

'Francesca, of whom I do not know where you have heard speaking before,...'

この説明法は、Rizzi (1982) が取り扱う他の用例 ((45-49)) を吟味した上で修正、あるいは廃棄すべきものであろう。

- 17) スペイン語に関する石岡 (1990b) では、移動経路の非包含関係 (部分的共通問題) と適格性 (文法性)、移動経路の包含関係と非文性 (*) の関連が指摘される。
- 18) 本稿の (5), (6) と (9) は、名詞句の主語、あるいは目的語である Wh 要素が当該名詞句を通過する事例である (この場合、仮説 γ の (g) により、Wh 要素が SPEC (N) に一時停止する点に留意されたい)。ここで、名詞句の所有者を表す Wh 要素が当該名詞句を通過する事例について考える。

(i) (?) *Francesca, [di cui]_i non so dove_i tu abbia conosciuto la sorella t_i t_j,... [26 b]

'Francesca, of whom I don't know where you have known the sister,...'

所有者 Wh 要素が基底生成される位置は、構造上 SPEC (N) よりも高位にあるため、当該 Wh 要素の SPEC (N) への一時停止が不可となる。仮説 γ の (g) により、所有者 Wh 要素は、一挙に最終着地点に移動することになる。その場合、両始発移動経路は包含関係を形成する。よって、接続法節内の IP の BC 性受け継ぎは発動しない。結果として、(i) は誤って文法的と予測されることになる。

つまり、(i) の事例は、D' に直接支配された位置に基底生成された所有者 Wh 要素が SPEC (D) 位置に一時停止可能であることを示す (この場合、両始発移動経路が包含関係を形成しないため、接続法節内の IP の BC 性受け継ぎが発動するため、当該文は非文と予測される。)

参考文献

- Adams, M. (1984). "Multiple Interrogation in Italian." *The Linguistic Review* 4, 1-27.
- Chomsky, N. (1986). *Barriers*. MIT Press, Cambridge (Mass.).
- Cinque, G. (1980). "On Extraction from NP in Italian." *Journal of Italian Linguistics* 1 : 2, 47-99.
- Grimshaw, J. (1986). "Subjacency and the S/S' Parameter." *Linguistic Inquiry* 17, 364-369.
- 長谷川欣佑 (1986). 「Barriers 批判」, 月刊『言語』15, 84-94, 大修館, 東京.
- 石岡精三 (1990a). 「VP 付加の代替操作について」 長岡技術科学大学 『言語・人文科学論集』4, 37-78.
- 石岡精三 (1990b). 「Torrego (1984) の再解釈— GB 理論の観点から—」. 長岡技術科学大学 『言語・人文科学論集』4, 79-100.
- 石岡精三 (1990c). 「GB 理論研究ノート (III-2) — 属格句を伴う名詞句の統語構造について —」, 長岡技術科学大学 『言語・人文科学論集』4, 101-122.
- May, R. (1985). *Logical Form. Its Structure and Derivation*. MIT Press, Cambridge (Mass.).
- Pesetsky, D. (1982). *Paths and Categories*. Doctoral Dissertation, MIT, Cambridge, Mass.
- Reinhart, T. (1981). "A Second COMP Position." in Belletti, A., Brandi, L., and Rizzi, L., eds., *Theory of Markedness in Generative Grammar*. Scuola Normale di Pisa, Pisa
- Rizzi, L. (1982). "Violations of the Wh Island Constraint and the Subjacency Condition." in *Issues in Italian Syntax*. Foris, Dordrecht.

Stowell, T. (1989) . "Subjects, Specifiers, and X-Bar Theory." in Baltin, M.R. and Kroch, A.S., eds, *Alternative Conceptions of Phrase Structure*. The University of Chicago Press, Chicago and London.